

2019年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 見出し

- 2019年1月6日 「わが福音」
- 2019年1月13日 「神の義、神の愛」(ヨハネ第一書より)
- 2019年1月20日 「聖書を生きる」——ピリピ書——
- 2019年1月27日 「ルカ伝福音書を読む」(ルカ伝第1回)
- 2019年2月3日 「一切を棄ててイエスに従う」(ルカ伝第2回)
- 2019年2月24日 「多く赦されたる者は、多く愛するなり」(ルカ伝第4回)
- 2019年3月3日 「種蒔きの譬話より」(ルカ伝第5回)
- 2019年3月10日 「懼るな、ただ信ぜよ」(ルカ伝第6回)
- 2019年3月17日 「日々おのが十字架を負いて」(ルカ伝第7回)
- 2019年3月24日 「栄光のイエス(山上の変貌)」(ルカ伝第8回)
- 2019年3月31日 「クリスチャンの栄光と望み」——人生は神讚美——
- 2019年4月7日 「弟子の派遣」(ルカ伝第9回)
- 2019年4月21日 「永遠の生命(真の霊的生命)を生きる」(レジュメ)
- 2019年4月28日 「もつとも大切な律法」(ルカ伝第10回)
- 2019年5月5日 「求めの切なるにより」(ルカ伝第11回)
- 2019年5月26日 「此の火すでに燃えたらんには」(ルカ伝第12回)
- 2019年6月2日 「聖霊の火」(ルカ伝第13回)
- 2019年6月9日 「助け主、真理の御霊」なる聖霊
- 2019年6月16日 「わが福音」
- 2019年6月23日 「我々の目標」
- 2019年6月30日 「キリスト一筋で生きる」
- 2019年7月7日 「キリストとの出会い」
- 2019年7月14日 「主の道を歩む」
- 2019年7月28日 「主様と一如」
- 2019年8月2日 「まず神の国と神の義を」
- 2019年8月4日 「聖書における『自由』、キリストの賜う『自由』」
- 2019年8月18日 「善き業を始め給いし者」
- 2019年9月1日 「主を悦ばせんが為に」
- 2019年京都夏季福音特別集会 資料
- 「祈り」の視点からの「み言葉集」——
- 2019年9月8日 (最も尊敬する人物の一人)



- 2019年9月15日 (衡平君の昇天を通して)
- 2019年9月22日 (内なる人は日々に新^{あらた})
- 2019年9月29日 (聖霊の感動)
- 2019年10月6日 (十字架、聖霊はワンセット)
- 2019年10月20日 (第二の創造)
- 2019年10月27日 (イエス・キリスト直伝)
- 2019年11月3日 (聖書は主と出会う書)
- 2019年11月10日 (御霊の賜う一致)
- 2019年11月17日 (新生命を賜わった者)
- 2019年11月24日 (聖書の御言葉に熱中)
- 2019年12月1日 (祈りの集会)
- 2019年12月15日 (家庭集会在祈りの拠点)



わが福音

2019年1月6日

聖書朗読 ①マタイ伝4章1〜4節 ②ヨハネ伝6章41〜59節

奥田先生は、京都キリスト召団が後世に続いていく為に、集会員に対して、いくつかの願い・課題を伝えられた。

課題…聖書を閉じたまま、聖句を書き出す（御言葉と一つとなる為）。

一年に一人を（キリストに導く）。一年に一人に（キリストを知らない人に伝える）。

願い…御言葉の中に生命がある。御言葉と共なる生活をして欲しい（理論的に強くなる必要はない）。

集会後の談話…自分なき後の集会は、全員野球で持ち回りで運営してくれればいい。その為には、キリストの聖霊の火がその人の内に燃えていなければ、実質運営はできない。願うことはただ、

「この火すでに燃えたらんには、我何をか要せん。されど、我には受くべきバ

プテスマあり」

「聖霊の火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、その為には、

私には受けるべき十字架がある」

と。我々が御言葉と一つとなって、その言葉に支えられて生活し、人の為に働く人となれば（十字架を担う生き方となれば）、主は我々の内に聖霊の火となって働かれる。

主は何故、聖霊の火となって我々の内で燃えたいと願われるのか？

それは、神との交わりの中で、永遠に続く欠けることなき幸福で我々を満たしたいから。

そうして主に救われた者は、主の福音を世に告げ知らせることによって、人々を罪から離れさせ、神の御国に招き入れる使命を自覚するようになる。



神の義、神の愛（ヨハネ第一書より）

2019年1月13日

聖書朗読 ヨハネ第一書2章7〜17節

寒さの中で、京都の鴨川ではユリカモメが群れをなして川面に降りてゆく。川の清掃が行き届き、冬に渡つて来る鳥たちが増えたようでも、目を楽しませてくれている。

このところつくづく思う。私たちの集会は、世から出たものではなく、世の思いで開かれているものではないと。今日、奥田先生は、集会の最初から、私たちのこの世での立ち位置を話し出された。

「なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。」（ヨハネ第一2・15）

「汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」（コロサイ3・3）

そのあとも、次から次へと御言葉が展開していき自在に語り出される。御言葉の豊かな蓄えを私たちも学ばなければと思う。先生は、今日、私たちが御言葉を豊かに身に付ける事ができるよう、その試みとして、「義」と「愛」が出てくる新約聖書の箇所を、先ずは手ぶらで思い浮かべ、次いで、その聖句を聖書から書き出してみる事を勧められた。「愛」は、今日読んだヨハネ書簡にたくさん出てくるので浮かんで来そうだが、「義」と「神の義」となるとどうだろう。

1 義、神の義

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。」（ロマ1・17）

「然るに今や律法のほかに神の義は顕れたり、……」（ロマ3・21）

「凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。」（同章23、

24節）

2 愛

「愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり。」（ヨハネ第一4・10）

「主は我らの為に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ第一3・16）

「愛には懼なし、全き愛は懼を除く」（ヨハネ第一4・18）

更に先生は、クリスチャンの3つの勧めとして、感謝、讚美、キリストへの全托を挙げられた。

「まず神の国と神の義とを求めよ」

の心である。新しい年が始まった。年頭に当たり、各自が今年の伝道のこころざしを立て、日々の祈りの課題としたいものである。



聖書を生きる

——ピリピ書——

2019年1月20日

聖書朗読 (1) マタイ伝7章13、14節、(2) ピリピ書1章20、21節

「我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、また望むところに適えるなり」(ピリピ1・20)

先生は、救いのことを日光のようなものであることを示されました。

先生の教えを本の中や、召団の壁の内側に閉じ込めてはいけません。また、自分自身のために時々取り出して、それからまた大事にしまいこんでおくのもない。それは日常生活を清め、どんな実務上の取引にも、また私たちのどんな社交関係にも顕きざるを得ない。聖書を生きるとは、外部から形づくられて着せられるものではなく、内部から輝き出るものです。もしわたしたちが、人をイエス様の道に導こうと望むなら、御言葉と御霊が私達自身の心のうちに宿っていないてはならない。

みことば・みたまを宿す者は、神の子らしく生きることです。矛盾のない生活、清い行状、変わらない誠実、積極的で情け深い精神、敬虔な模範、一貫性、真実味、信頼感、配慮、愛、陰口などを言わない姿、他の人を励まそうとする態度、こうしたものが世に光を伝える手段です。

2019年、奥田昌道先生みことば100選、かるた大会を企画しましょう。



ルカ伝福音書を読む（ルカ伝第1回）

2019年1月27日

聖書朗読 ルカ伝5章1〜11節

今日から、「ルカ伝福音書」の第1回講筵が始まりました。5章1節から10節には、不思議なことが書かれています。漁師のペテロが一晩中かかって漁をしたが、1匹の魚も捕れなかったのに、素人であるイエスが、

「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」

と言われて、ペテロがその言葉に「はい」と素直に従って網を降ろすと大漁になり、その後一切を捨ててイエスに従ったという記事です。ここには、み言葉に従って行動すると、自然法則を突き破った法則が働くこと、霊の法則が自然法則を突き破って現れ、奇跡の世界が生まれることが示されています。

この世には、自然の法則が働いています。それゆえに、人は、自分が蒔いた種を自分の責任で刈り取らなければなりません。その責任を神様に帰してはなりません。それは、

「神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また

刈り取ることになるのです。自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、

霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。」

とガラテヤ書6章7〜8節にあるとおりです。

しかし、自分の蒔いた種を背負うことができなくなり、どうすることもできなくなった時には、謙虚に反省して、

「主様、どうかお助けください」

と主様に全托してください。主様は、十字架のもとにひれ伏した者を抱き取って、自然法則を超えた霊の法則を働かされ、艱難を乗り越えて進むことができるように変貌させてください。

ところで、霊法の世界に入るためには、富や才能など自分が最後の拠り所としているものを全て手放して神様にお返しする、自分への執着を捨てることを要求されます。

マルコ伝10章17節以下の富める青年の話は、その消息を物語っています。彼は、信仰深い青年でしたが、残念ながら、自分自身が目的で、神様が手段であったのです。

霊法の世界に入ることとは、決して特別な修行をする訳ではなく、ペテロのように、古い自分を捨ててキリストに従い、キリストの証し人になることです。いつも言うように、

「我キリストとともに十字架に付けられたり。もはや我生くるにあらず、キリ

スト我が内にありて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

の境地に達することです。



一切を棄ててイエスに従う（ルカ伝第2回）

2019年2月3日

聖書朗読 ルカ伝5章17〜28節

聖書を本当に読む為には、主の聖霊に満たされる必要がある。その為には、日々の生活を主と共に歩み、自分の能力や正しさの限界を知り、主に助けを求める人となる必要がある。そのようにして、祈りの時間（主との交わりの時間）を持つようになれば、主に似た者に変えられていき、聖書を読むことも、祈ることも、働くことも、讚美することも、その人にとって自然なこと・嬉しいことになる。

ただ、我々は、この世にいて肉体を持つ限り、絶えず罪（神の御心を退けて、自分の意志に従って生きること。そのようにして幸せを得ようと考えること）の誘惑にさらされる。この誘惑に打ち勝って霊的成長を遂げる為にも、祈りによって主と交わり、導きを受ける必要がある。

一切を棄ててイエスに従う…パウロやサンダー・シングは、実際にそのように生きた。使徒達も殉教するまで、キリストの福音を伝え続けた。このようになるには、主の聖霊を豊かに受けない限り、絶対不可能である。

サンダー・シングの言葉…

「自分自身の内的生活の中で、主の神性を体験することもなくキリストに従っていないクリスチャンが今も沢山いる。このために彼らは墮落するのである。彼らは、キリストとは二千年前に生きて死んだ偉人の一人ぐらいにしか考えない。だが、心底悔い改め祈る者に対して、主は聖パウロに向けられた栄光と力の中で、ふたたびご出現になる。彼らはキリストとの交わりを新たにし、聖霊の力によって忠実に、死ぬまで主にお仕えする。」

キリスト…

「わたしが洗礼を受け罪人の救いのための十字架を身に負ったそのときに天が開かれ、三十三年にわたり背負った十字架とその上での死によって、罪のためにそれまで閉ざされていた天が、信じる者のために永遠に開かれたのである。そして今、信じる者は自分の十字架をとってわたしに従うや否や、わたしを通して天界に入り、この世では理解できないあの計り難き至福を喜び始める。わたしは子供たちに苦しみの中の安らぎ、完全な幸せと平和を与える。喜びをもってわが十字架をとる者は、その十字架によってもち上げられ、その十字架に支えられたまま、ついには天界に入る。」



多く赦されたる者は、多く愛するなり（ルカ伝第4回）

2019年2月24日

聖書朗読 ルカ伝6章46〜49節

今日の京都は、朝のうちは冷たかったものの、外の光は優しくきらめき、次第に気温も上昇して春の到来を間近に感じさせる穏やかな日でした。

最近の先生のご講筵は、いよいよはつきりと私たちの目指すべきところを語っておられます。その核心は、私たちが、様々の困難な出来事に会ったときに、常に

「主様、あなたは私に何を求めておられますか。」

という角度から主様に向きあっているか否かです。主様が自分に何をしてくださるのかという「地の次元」から主様を求めていると、いつまで経っても本物を掴むことができません。人が人生の分岐点に立った時に、「天の次元」（主の御心）から出発するのか、自分から出発するのか、その決断は極めて重大で、正しく選択して進まなければなりません。その選択を誤り、主様を自分のための手段やご利益の対象とすると、現象面に一喜一憂して本当の世界に至ることはできません。

主様を第一とする生き方をするためには、先ず、キリストは、「神様よりも自分を大事にする」自己中心的な者である私を無条件に許してくださっていることを深く自覚すること、

「主様、あなたの十字架なくしては、私はあなたの前に立つことができませぬ」というひれ伏しの姿勢であることが大事です。

主様は、自分の全存在を投げ出している者に対して働かれ、様々な不思議な業をされます。そして、主様から許されていることの多い人ほど、主様の愛を実感し、どんな苦難の道が与えられようとも、黙々と主様のために働くことができます。私たちは、常に

「聖書を生きて、キリストを生きたる」

生活をしているかを問い直しながら、キリストと同じ道を歩む使命があります。

主キリスト（主様）は、聖書を通して人の進むべき正しい道を教えてくださいますので、安心して、このお方に人生を托してゆきましょ。



種蒔きの譬話より（ルカ伝第5回）

2019年3月3日

聖書朗読 ルカ伝8章1〜15節

「岩の上に落ちし種あり、生え出でたれど潤澤なきによりて枯る。茨の中に落ちし種あり、茨も共に生え出でて之を塞ぐ。良き地に落ちし種あり、生え出

でて百倍の実を結べり」（ルカ8・6〜8）

先生は、御言葉に感動し、先生の言われる告白を喜んで聞いていながら、聖霊様の内住に身を任せなかつた人々のことを述べられました。

主様の恵によつて、彼らはこれまで自分の魂を支配していた悪しき力から解放された。彼らは神の愛を喜んだ。しかし、岩の上に落ちた種（御言葉）が根を下ろし得なかつたように、心が岩のように堅いために、御言葉が実を結ぶに至らなかつた。彼らは心の中にキリスト様に住んでいただくように日々自分自身を神様に委ねることをせず、かたくなになつた。心がかたくなになるのは、光をこぼむからです。（わたしなんかは）この過程は徐々でほとんど気がつかない場合が多い。光は聖書の御言葉を通し、先生の告白を通し、あるいは御霊様の直接の働きによつて魂にのぞむ。しかし、ひとすじの光が無視されると、霊的知覚力が部分的に麻痺し、次に光があらわされたとき、それは前ほどはつきりみとめられなくなる。こうして暗さが増し、ついには魂に夜が訪れる。

これに対する唯一の防備は、心のうちに（十字架・聖霊の）キリスト様に内住していただくことです。主様とのいのちのつながりをもたないかぎり、わたしたちは、利己主義、放縦、罪への誘惑などの穢れた影響に抵抗できない。

キリスト様を個人的に知り、たえず集会で御霊様と交わっていれば、護られ百倍の実を結べるようになります 平安



懼るな、ただ信ぜよ（ルカ伝第6回）

2019年3月10日

聖書朗読 ルカ伝8章40〜56節

奥田先生は、今後の集会の在り方に関して、以下のように熱い思いを伝えられた。

「主がしてくださった事を、事実を事実として、告白・証言して欲しい」

「集会は、頂いた恵みを皆が持ち寄って作り上げるもの。皆で主を讃美する場所」

「集会は生き物、筋書きのないドラマ。人間の側で主の無限無量の働きを妨げない」

「主よ、どうぞお働きください、御言葉と共に歩ませてくださいと願って行こう。」

集会が生まれ変わるように。」

先生は、集会を皆で作りたい、各人が主から頂いた恵みを皆の霊的成長の為に証して欲しいと強く願っておられる。

司会者も全く同感で、先生の願いが叶わないなら、召団に未来はなく、主が悲しまれるに違いない。主に救われた我々は、ただ自分の救いと幸せの為だけに主を求めるのだろうか。それでは利己主義と変わりなく、いずれ我々は霊的に自殺することになる。主（十字架を担う生き方）を求めていながら、それに反するように利己的に生きるなら、我々は幹から切り離された枯れ枝と同じく生命が枯渇し腐ってしまう運命にある。

サンダー・シングの言葉..

「利己主義もまた、ある意味での自殺である。神は人助けに使える何らかの素質や能力を誰にでもお与えになっているからだ。われわれは、人助けをしているときに新しい喜びを知り、また自分自身をも助ける。これは内なる存在の法則である。他を助けなければ、この喜びを失うことになる。自分と同じように隣人を愛することがなければ、神に背いていることになる。このような背きによって、靈魂の糧そのものである歓喜が失われ、靈の飢えによってわれわれは自分を殺すことになる。利己的人間は自分の益のために働いていると思いついてはいるが、知らずに自分自身に大きな損失を加えているのである。誰もが心を改めて利己主義を捨て去れば、この世のすべての紛争や諍いさかいはなくなり、地上も天国と化すだろう。すべては利己主義からくるのである。「自分を捨て、わたしについてきなさい」と主がお命じになった理由はここにある。」

「最大の奇蹟は人の中の「新生」である。この奇蹟を体験した者には他のことすべてが可能になる。」



日々おのが十字架を負いて（ルカ伝第7回）

2019年3月17日

聖書朗読 ルカ伝9章18〜27節

「人もし我に従い来らんと思わば、己を捨て、日々おのが十字架を負いて我に従え」（ルカ伝9・23）

「からだで聖書を味わっています。わたしの現実はこれです。わたしにおいても実現します」

と先生は、おっしゃいました。

イエス様は、非難と侮辱の生涯を送り、死の恥を受けるために天から降られました。

天の測り尽すことができない宝に富んでおられたおかたが、御自分の貧しさによってわたしたちが富める者となるために、貧しくなられた。わたしたちもイエス様が歩まれた道に従いましょう。それは、自我を十字架につけることを意味します。神の子である者は、自分自身を世の救いのために捧げられた聖意体現者とみなさねばならない。すなわち、主様の憐れみの計画において、自分をキリストと一如とみなし、行き詰まっている人や失われた者を探し求め、これを救うために、キリストと共に世に出て行かねばならない。

召団員は、自分の賜物を通して世にキリストを体現するのだということに絶えず認める。キリストの、生活に現わされた自己犠牲と愛が御心のために働く者の生活に再現される。貧しさと屈辱のあなたに、忽然と、栄光の本来の御姿に変貌されたイエス様によって、その時には、わたしたちの実際のおこないにに応じて、それぞれに報いてくださいます。

本日の集会は、皆が喜びと平安の証を持ち寄っての集いとなりました。感謝



栄光のイエス（山上の変貌）（ルカ伝第8回）

2019年3月24日

聖書朗読 ルカ伝9章28〜36節

今日、朗読したルカ伝9章に、主イエスが弟子3人を連れて祈りのため山に登った際、深い祈りの中で、御顔の状さまが変わり、その衣が白く輝いて変貌されたとある。今日は、この変貌のところをマタイ伝、マルコ伝の関連記事もたどりながら学んだ。この記事の直前に、ペテロが「あなたは神のキリスト（救世主）」と告白したこと、主イエスが弟子ら一同に、「日々おのが十字架を負って私に従いなさい」と述べられたこと、初めて御受難の事を告げられたことに、それぞれ目を止めた。主イエスが祈りの中で白く輝かれたことは、復活の前兆のようなものとのこと。私にも、イエス様なら、深い祈りの中でそのお姿が栄光に輝くことは十分うなずける。へブル書にも

「御子は神の栄光の輝き、神の本質の像にして」（へブル1・3）

とある。雲の中から「汝ら之に聴け」との声があった。

しかし、それに続く山を下ってからの記事では、主イエスの元に群衆の一人が悪霊に取りつかれた子の癒しを求めてきたり、弟子たちの争論があったりで、神の栄光の事態とは別次元のゴタゴタとした地のことが書かれている。弟子たちの間で誰が一番偉いかの議論に対しては、幼児の如く己を低くする者であれ、また、そのような小さい者を受け入れるようにと論された。さらに、

「おさない幼児のような心で素直に神の国を受ける者でなければ、これに入ることとは出来ない」

と論されている（ルカ18・15〜17）。

イエス様の心は幼児そのものだった。いつも父なる神様の御意みこころを求めて祈っておられた。御子でありながら僕の姿となり、十字架の死に至るまで神様の御意に従い抜かれた。また、パウロは、世には愚かと思える宣教に全身全霊で従事し、

「わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明に
よりたり。」（コリント前2・4）

と告白した。私たちもこの愚かさに徹しなればと思う。奥田先生は私たちに、それぞれが従事する仕事・働き・与えられた持ち場の事を、主から賜ったものとして、祈り心で当たるよう励まされた。その献身の心に主の聖霊が働いてくださり、私たちを平安と神讚美の存在として活かし、光を放つ者に変貌させてくださると。

「然れば我が愛する兄弟よ、かた確くしてうご揺くことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。」（コリント前15・58）



クリスチャンの栄光と望み——人生は神讚美——

2019年3月31日

聖書朗読 コロサイ書1章24～29節

桜も咲き始めて春爛漫の季節になりました。京都では、今日も熱い集会が持たれました。先生は、最初に

「集会は真剣勝負の場であるから、祈り心をもって臨むように」

と集会に対する心構えを改めて強調されました。ご講筵は、詩篇33篇、34篇、36篇、37篇、103篇、コロサイ書1章27節、ピリピ3章をたどりながら、

「徹頭徹尾、人生は神讚美の生き方をするのが究極の目標である」

と力強く語られました。

聖歌604番の「望みも消えゆく」ような事態に出会った時に、自分は主様からどれだけ助けていただいたか、主様の御護りがあったからこそ数々の試練をくぐり抜けて来られたではないか、そのような主の見護りに預かつてきたことを思い出してください。主様を真剣に求める人には、

「この苦しむ者叫びたれば主これを聴き、そのすべての患難より救い出されたま

えり。主の使者は主を畏るる者の周りに営つらを列ねて、これを援たすく」（詩篇34・

6～7）

の現実が成って行きます。私たちには望みがなくても、主様がおられます。主様は、絶えず天界から生命の御霊を送られ、その御霊が一人ひとりに宿って私たちを命づけ助けてくださるのです。これをしっかりと受け取ってください。限界はありません。キリストは無限無量の御方です。無私無欲に徹し、

「主よ、あなたの御心が成って行きますように。主よ、この身を通して働いてくだ

さう」

と幼子の気持ちで祈ると、主様は、私たちを通して働かれます。私たちは、キリストの管となって、悩める人、患難にある人に福音を語り、キリストの霊を注いで行きましょう。

このように、自分を忘れて人の為に尽くすと、その人自身がキリストによって霊的に高められ、強められ、天に宝を蓄える事態になってゆきます。運命環境がどうであろうと、それを乗り越えて神讚美に徹し、この福音を伝えてゆくのが人生の目的です。

主様は、私たちが真剣に求める限り、恥を負わせられません。私たちが主様に対して忠実に生きるなら、子々孫々まで祝福してください。地上は、決して天国ではありません。修行の場です。しっかりとこの地上での修行を経て、天国において祝福されるように、主様のため、福音のために、全身全霊をもって働きましょう。



弟子の派遣（ルカ伝第9回）

2019年4月7日

聖書朗読 ルカ伝9章1〜27節

快晴の中、聖日集会が開かれ、集会場の前を流れる鴨川沿いの桜も満開であった。集会後、桜の美しさとそこに戯れる雀たちに見とれていると、御国の心地がした。我々は、厳しい現実を主にあつて一生懸命生きるからこそ、主の恵みを深く受け取ることが出来る。

主は、全ての人を主の恵みの中で祝福したいと願っておられる。その為には、主が十字架を背負ってくださったことによつて、罪（利己主義）の為にそれまで閉ざされていた天が、信じる者のために永遠に開かれたという厳然たる事実を認める必要がある。

日本において、花見を楽しむ人たちは、どこまで本当の意味で花見を楽しんでいるのだろうか。多くの人は、体の衰えと共にいずれ楽しめなくなるのではないかと思う。しかし、真に主に赦された者は、魂に新生命を、生活に知恵を、仕事に能力を頂く故に、若返つて驚くように新たにされて、元気いっぱい嬉しさいっぱいで主に感謝し主を讃美しながら、どこまでも主と一つとされて生きるのです。心ゆくまで自然を楽しむことも出来るのである。喜びをもつて主の十字架をとる者は、主から、苦しみの中での安らぎ、完全な幸せと平和を与えられるのである。

我々は主からこの世に派遣されたのだ、と思うようになった。自らの霊的な成長の為だけでなく、人類を死の苦しみから救うという神の御計画に身を捧げる為に。

我々の意志が不十分で頼りないとしても、かつて主が弟子たちを選ばれたように、主が我々を選ばれたのだと思う。主が我々を選んで派遣されたのなら、責任は任命権者である主が取られる。主が我々に敵（悪霊）に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになる。

我々は立派でなくて構わない。母の腕に抱かれた幼子・乳飲み子のように、主に委ねて行けば良い。常に主の御守りの中で、自らの使命を果たせば良い。人と比べず、主との個人的なつながりの中で、何をなすべきか自らの使命を自覚していこう。働きは人それぞれであり、その人にしかできない働きがある。そうして、働きの結果を喜びをもって止むにやまれず証しできるようになっていこう。

主は、聖霊となつて、我々の中に入りたいと願っておられる。心を主に明け渡すことが出来れば、主が我々の中で働かれる。



永遠の生命（真の靈的生命）を生きる（レジュメ）

2019年4月21日

奥田昌道

I 序 自然界は春になると、冬枯れの「死」の相から、春の新しい生命の相へと変化する。正に「甦り」、死から生命への復活と呼ぶにふさわしい様相を呈する。そして、春から初夏にかけて、自然界は生命の輝く季節を迎える。

人間界においては、どうであろうか？

肉体が死滅した後、復活（甦ること）があるのだろうか？

肉体は死の後、焼かれて土に帰るとしても、霊（靈魂）は生き続けるのか？

生き続けるとしても、それは、どんな世界、どんな次元においてなのか？

II 旧約聖書の記述から

(1) エゼキエル書37章に、枯骨の復活の記事がある。

エゼキエルが主の霊に満たされて谷に入った。そこには多くの枯骨が満ちていた。

エゼキエルが主なる神の命に従って主の言葉を伝えると肉体が形成され、さらに息に預言すると息が体に入って彼らは生き返り、大いなる群衆となった。エゼキエルに賜わったこの「異象」は、人間の生命^{いのち}は肉体の死では終らない事を示している。

(2) 詩篇第103篇（ダビデの歌） 1〜5節

「わがたましいよ、主をほめよ。わが内なるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがないだし、慈しみと憐れみとをあなたにこうむらせ、あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる。」

III 新約聖書の福音書および使徒行伝から

1 イエス・キリストの言葉と御業から

(I) イエスの愛の御業は、病人を癒し、死人をも甦らせる事において顕わされた。印象深いのは、独り息子で母は寡婦という境遇のナインの若者の柩に手をつけて、

「若者よ、起きよ」

と呼びかけて生き返らせた話（ルカ伝7章11〜17節）、

会堂司ヤイロの12歳の娘を、

「タリタ、クミ」（少女よ、さあ、起きなさい）

との言葉で生き返らせた話（マルコ伝5章41節、ルカ伝8章54節）、



死んで4日間も墓の中に置かれていたラザロを生き返らせた話（ヨハネ伝11章1〜44節）などである。このようなイエスの活動は、洗礼者ヨハネが獄中からイエスの御業について聞いた時の以下のような答えによく頷れている。

「行つて、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまずかない者は、さいわいである」。

（2）イエス自身の死と復活については、

第1回目がマタイ伝16章21〜23節、マルコ伝8章31〜33節、ルカ伝9章22節、

第2回目がマタイ伝17章22〜23節、マルコ伝9章30〜32節、ルカ伝9章44節、

第3回目がマタイ伝20章17〜19節、マルコ伝10章32〜34節、ルカ伝18章31〜34節に記述されている。

2 イエスの復活と弟子の歓喜

マタイ伝28章1〜10節、マルコ伝16章1〜8節、ルカ伝24章1〜11節。

復活されたイエスと弟子たちの出会いで感動的なのは、エマオへと旅立った二人の弟子の道伴者として旅人の姿で弟子と語り合い、ご自身の受難と栄光について解き明かされ、エマオ村の近くの宿で食事の席に付かれた時、パンを祝福して割いて渡される様子から、それがイエスだと分かった瞬間に御姿が見えなくなった。そこで、直ぐにエルサレムの弟子仲間のところへ帰り着くと、イエスが彼らの中にお立ちになって彼らを励まされたという記事である。

3 エルサレムの弟子たちの宣教

使徒行伝2章の五旬節の日の「聖霊の降臨（聖霊のバプテスマ）」以降の弟子たちは、復活されたイエスこそが「救い主」であることを高らかに謳い、その御名によつて、癒しの業を展開して行った。

4 ヨハネ伝における、イエスによる「永遠の生命」の約束

3章16節、

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」。

5章24節、

「よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。……墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善を行った人々は、生命を受けるためによみがえり、悪を行った人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」。



6章53節～57節、

「イエスは彼らに言われた、『よくよく言っておく。人の子（イエスのこと）の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。……わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしに居り、わたしもまたその人に居る。』」

6章63節、

「人を生かすものは霊であって、肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」

IV 新約聖書の中のパウロ書簡から

我々人間が、死後、どのような状態で居るのかについて、使徒パウロは「コリント人への第二の手紙」第4章16節から第5章10節において語っている。

「だから、わたしたちは落胆しない。たとい、わたしたちの外なる人（肉体）は滅びても、内なる人（靈魂）は日ごとに新しくされて行く」

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋（肉体のこと）がこわれると、神から頂く建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家（霊体のこと）が備えてあることを、わたしたちは知っている」

また、「第一の手紙」16章では「死人の復活」について述べている。

「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに甦り、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに甦り、弱いもので蒔かれ、強いものに甦り、肉の体で蒔かれ、霊の体に甦るのである」

と。

V 我々の生き方

1 十字架・復活・聖霊の主キリストに在って生きる。

生まれながらの「我」は、神よりも自分（我）を大切にする「肉」なる相において生きていた。存在そのものが聖なる神の御心とは相いれない「自己中心」的な生き方しかできなかった。それでいて、絶えず、病氣、事故、災害などの「災い」に対して不安があり、こころ安らかではなかった。私（奥田）は、将来に対しての心配・不安、そして、自己の内面の醜さなどに苦しんでいた。

そんな私の全て（過去・現在・未来）を、

「我に委ねよ」

と引き受けてくださっている方、主イエスに出会うことが出来た。旧き我は「十字架上で死に」、新しい我を賜わった。

ガラテヤ書2章20節・21節のパウロの告白、コリント前書1章18節のパウロの告白は、



我が告白となった。

思い煩いの塊であった私を解放してくれたのは、マタイ伝6章25節〜34節の、

「何事をも思い煩う事は不要。まず、神の国と神の義とを求めよ。さらば凡てのものは加えらるべし。この故に、明日のことを思い煩うな。一日の苦労は一日にて足れり」

との恵み深い主イエスの言葉であった。

2 「信・愛・望」に生きる。コリント人への第一の手紙13章。

3 ローマ人への手紙第8章を生きる。とくに、26節から39節。

「如何なる運命・環境・艱難、その他どんな被造物もわたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」

4 ヨハネ伝14章〜16章。弟子たちとの別れに当たつての主イエスの言葉（訣別遺訓と呼ばれているもの）。

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また、我を信ぜよ」

に始まるこの箇所は、幾たび読んでも、力強い励ましを受ける。その終りは、

「なんじら世に在りては患難あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」
で結ばれている。

5 マタイ伝11章28節〜30節

「凡て労する者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に学べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり」

まことに、

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」

との答えをもって、サタンの誘惑を退け、その言葉を実践された主イエスの言動は、わたしたちを励まし続け、力を与えてくださる。

「我は道なり、真理なり、命なり」（ヨハネ伝14章6節）

と宣言しておられる主イエス・キリストに従つて生きる生き方こそが、永遠の生命を賜わった者として、ふさわしい生き方である。



もつとも大切な律法（ルカ伝第10回）

2019年4月28日

聖書朗読 ルカ伝10章21〜24節

今日は、平成最後の聖日集会となりました。30年にわたる平成の時代には、各人が多くの苦難に見舞われましたが、それを乗りこえて新しい令和の時代を生き抜くための貴重な御講筵をいただきました。また、先週の復活節を契機にして、神様から、改めてこの集会に対し、福音書の御言葉を体受するとともに、祈りを深めて聖霊の主様と一つになる信仰に立ち返ることが示されたと感じました。

最初に、詩篇19、34、37、57、62、63、73篇を通して祈りの重要性を語られ、詩篇をキリストの恵みの中で受けとるという角度から読み込み、日々の糧とし、神・キリスト讃美の祈りの友として親しんでくださいと話されました。

本論では、ルカ伝10章21〜22節とマタイ伝11章25〜27節を対比して、次のように話されました。マタイ伝11章25節は、イエス様が様々な苦勞をされて骨折り損のくたびれ儲けの気持ちになられた時に聞こえてきた神様の御声です。

私たちも、地上で十分に努力したけれども、報われないと思い、挫折感を味わうことがあるかもしれませんが、それを嘆く必要はありません。神様は、地上で報われなくても大丈夫、キリストを見なさいと言われています。その御言葉を受け取るには、物事を見る視点（出発点）を「自分に」ではなく「神様に」置くという大転換が必要です。

「神様、あなたは私に何を望みますか。あなたの御心を教えてください」と問いかけ、神が、私たちに何を語り、何を求めておられるかを知ると、報われたかどうかという問自体が相対化されて無意味になってきます。幼子のようになってキリストの御心を受け取ると、キリストが隠れた真理を開示してくださり、私たちの物の見方が自分中心から神様中心へと根本的に変ってくるのです。

このようなキリストの御心を知り、これを他者に伝えてゆくためには、自分（自己）が根源的に十字架で片づけられていることを受け取るとともに、絶えず聖霊を注いでいただき、祈りの人にされていくことが必要です。そして、豊かな内容を持つ聖書を命の書として座右に置き、死んでも死なない永遠の命をいただいて、相対的現実を乗り越えて天国への旅路を歩むことが、集会員各自に与えられた使命です。



求めの切なるにより (ルカ伝第11回)

2019年5月5日

聖書朗読 ルカ伝11章1〜13節

若葉が風に揺れて目に優しく、野山は春一色に彩られている。庭では、春の草花が一斉に可憐な花を付けている。好い季節となった。

ルカ伝の連続講義が続いており、今日の集会では「主の祈り」と「聖霊の求め」の個所を、ルカ伝とマタイ伝から学んだ。主イエスは弟子たちの求めに応じて祈りを教えてくださった。主の祈りは、先ず、父なる神様への讃美、御国の到来への祈りなど、神様への感謝で始まっている。私たちも祈りの初めに、魂を父なる神様の御意を思う次元に入れていただと、祈りが天に向かう。自分の差し迫った問題を直ぐに口にするのではなく、主の祈りをお手本としたい。続いて先生は、

「求めの切なるにより」(ルカ11・8)

の聖句に注目された。口語訳では、

「しきりに願うので」

と書かれているとのこと。やはり祈りにも、必死の思い、切なる求め、渇きが大事と思われる。しかし、このような切なる求めは、思いもかけず自分に降りかかった辛い出来事や、家族、友人の試練、苦難を自ら身に負おうとする厳しい体験などから生まれると思われる。この点は、血漏の女、ヤイロの娘、スロ・フェニキヤの女の記事から、その祈りの姿を学びたい。人間的な次元、目に見える形で事が成ったか否かが大事なのではない。私たちの思いを超えて深い御意をなし給う主キリストに信頼し、その御働きを第一とし、

「まず神の国と神の義とを求めよ」

の心を大事にしたい。続いて先生は、「聖霊」のことに話を進められた。

「天にいます汝等の父は、求むる者に善き物を賜わざらんや」(マタイ7・11)

とあり、ルカ伝では善き物が「聖霊」であると書かれている。奥田先生は、私たちが最も求めるべきものは聖霊であり、聖霊によって初めてキリストと私たちが真につながり、魂と魂、霊と霊との交信が出来ると話された。主キリストも、

「私(キリスト)の名によって父の遣わす聖霊が、汝らに万のことを教え、助け主

となり、平安を与える」

と約束してくださっている(ヨハネ14・26〜27)。したがって私たちは、聖霊を頂けるよう、聖日集会を大事にし、キリストとその御言葉を喜んで学び、一人ひとりが聖霊の宮であることを深く自覚し、思いを一つにして祈っていききたい。



此の火すでに燃えたらんには (ルカ伝第12回)

2019年5月26日

聖書朗読 ルカ伝12章1〜12節

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」

主は、聖霊の火を人々に投ずる為に、地上に来られた。その聖霊の臨在は、大事な事を教えてくださる。それは、主が十字架において御血を流されたことよって、その血潮によつて我々を罪と死の苦しみから救ってくださいました事だ。主は、既に我々人類の救いを全うされている。その救いを我々人類が本気で求めるかどうか。救いを求めず、神がお定めになった救済の道を侮る者は、自らの罪の毒によつて滅びるのである。

キリスト…「人類は聖性の頂きから転落し、罪に打ちつけられたまま横たわっている。この傷により、彼の霊的生命は衰え、死に瀕している。だが、わたしは信じる者のために永遠の霊的血を注ぎ出す。彼らが死から救い出され、永生を手にするためである。彼らが生命を得るため、より豊かに生命を得て永遠に生きる、この目的のためにわたしは来たのだ。」

主に救われた者の、他への働きかけ、主にある思いやりは大変重要である。苦しんでいる人を救い上げ、主の絶大な恵みの中へと人々を導く仕事がいくらでもある。しかし、絶えず主の聖霊の臨在の中で生活しない限り、神の御心や御計画を理解することが出来ず、従つて他を助ける為の本当の力は出てこない。

キリスト…「奉仕とは霊的生命の活動を意味するもので、愛がせき立てる当然の捧げものである。愛である神は、被造物の世話のために絶えず活動しておられる。被造物、特に神の似姿に造られた人間もまた、決して怠らずにすることが神の願いである。被造物の世話と維持においては、神は誰の助けも要しない。神の助けがなければ何も存続しえぬように、神は万物をお造りになったからである。また、人の願いを満たすに必要なものをすべて供給されているのも神である。」「他に仕えるということには、仕えている本人が助けられるという大きな利点がある。」「信じる人々が聖霊の受け入れと奉仕に適するようになる最善の方法は、天の声に従い、できる範囲ですぐさま仕え始めることである。水泳がうまくなるには、自ら水に入り手足をばたつかせなければ、指導を受けても無意味である。練習を絶えず続けることよつてのみ、浅い所から深い所へと徐々に泳ぎの達人になつていく。そこで、罪という深い水に溺れている者たちの靈魂を救う最良の方法は、ただ一つの真の実用的な神の学校、つまりわたしのつながりに入ることである。」

人々を救い上げる仕事をする為には、主とのつながりに入り、実際に活動しながら主から様々なことを教えてもらい指導してもらわなければならない。我々はいつも、まず神の国と神の義(キリストの生き方)を求めていけば、必要な物・助け・能力・意欲・使命等全て添えて与えられる。



聖霊の火（ルカ伝第13回）

2019年6月2日

聖書朗読 ルカ伝12章49～53節

ルカ福音書の連続講筵が続いている。聖書のあちこちに寄り道・回り道をしながら、注目すべき御言葉に焦点を当ててゆつくりと進む。今日の講筵ではルカ伝12章の記事を、マタイ伝の記事も参考にしながら学んだ。最初に先生は、

「(身を)殺したる後ゲヘナ(地獄のこと)に投げ入るる権威ある者を懼れよ。」(ルカ12・5)

の御言葉に注目された。マタイ伝では

「身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。」(マタイ10・28)

とある。傍若無人、大いなる者への畏れの心が無い者があるが、地獄に投げ入れる権威ある者、すなわち神を畏れよとの心であり、人間を超えた大いなる存在こころべに首を垂れるべきことを聖書は教えている。次に、

「凡そ言をもて人の子に逆ぶ者は赦されん。されど聖霊を瀆けがす者は赦されじ。」(ルカ12・10)

の御言葉に注目した。聖霊はキリストが十字架にお架かりになった後、私たちの為に助け主として与えてくださった尊い霊である。これを知りながら罪を犯し、キリストを侮ったり踏み付けたりすることは、サタンの手先であり、永遠に赦されない。これは上記の、

「身と靈魂とをゲヘナにて滅ぼし得る者をおそれよ」

の御言葉と通じるものがある。

続いて、講筵の本題に入り、ルカ伝12章49～50節の御言葉に目を向けた。先生は、キリストが一番願っておられたのは、弟子たちに聖霊の火が燃え上がることであり、キリストは聖霊を与えんがためこの世に来られた、と話された。ここでヨハネ伝1章29節以下に目を移し、洗礼のヨハネがイエスのことを、「世の罪を除く神の子羊」であり、「聖霊にてバプテスマを施す者」と述べている箇所を引かれた。主イエスは、十字架で私たちの罪(自己中心の「肉」なる相)を根源的に帳消しにし、神中心に生きる者として新たに造り替え、そこに聖霊を注ぎ込もうとされている。私たちが神の子とするために、キリストが生命をかけたくださったことを夢忘れることなく、恵みを戴いた者として、使徒行伝のペテロ、パウロの次元に突き進んで欲しい、と熱く語られた。

最後に先生は、ガラテヤ書2章20節以下と、コロサイ書3章1～4節を深く受け取るように奨励された。パウロはローマの信徒たちに

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣け」

と勧めた(ロマ書12・15)が、私たちも集会の最後に祈った姉妹のことを共に祈り続けたい。



「助け主、真理の御霊」なる聖霊

2019年6月9日

聖書朗読 使徒行伝2章1〜24、32〜33節

今日は、今年の聖霊降臨節（ペンテコステ）記念日に当たることから、「聖霊」に焦点を当てて御言葉を学ぶことになった。初めに使徒行伝に目を向け、1章から2章までを読み進んだ。使徒行伝の初めにイエスは、十字架の苦難を受けた後、使徒たちに、

「エルサレムを離れずして、私から聞いた父の約束を待つよう」

に告げ、更に、

「汝等は間もなく聖霊にてバプテスマを施され、かつ、聖霊が臨むとき能力を
受ける」

と告げられた（使徒行伝1・3〜8）。ここを先生は、

「イエスの十字架を全身で受け取る者は、もはや罪なきもの、義なる者とされてお
り、そこに聖霊が注ぎ込まれ、生命と喜び、平安が与えられ、神の力を戴いて世
の光、地の塩とされる」

と話された。続いて2章の聖霊降臨の記事に進んだ。ここは聖霊の降る様子と、聖霊に満
たされたペテロの姿が目に浮かぶように書かれている。ペテロは、

「すべて主の御名を呼び頼む者は救われる」

「イエスが死に支配される方ではなく、私たちに約束の聖霊を注いでくださる
方である」

と告白している。聖霊が、いつ、どの様な形で臨むか、これは神様の御手の中にある。こ
の生命の霊、愛の霊を頂けるよう祈り求めたい。

続いて先生は、ヨハネ伝13章〜15章の聖霊の箇所を目を向けられた。ここでは、キリス
トの訣別の言葉の中に、聖霊のことがいっぱい書かれている。キリストは、

「聖霊が私たちの助け主であり、真理の御霊であること、私を愛するとはその御言
葉を守ることであり、私が去った後、父なる神様が遣わす聖霊が萬のこと教える」

と語られる。同時にキリストは、私たちに、

「心を騒がすな、わが平安を汝らに与える」

として、

「我に居れ、さらば我なんじらに居らん」（ヨハネ15・4）

と諭された。最後に先生は、次のように奨励された。私たちの集会を支える力も、この世
でキリストと共に生きること、人間の熱心だけで続けられるものではない。一人ひとり
がイザヤ書64章1節以下の切なる祈りをもって御霊を祈り求め、互いに相愛して集会に聖
霊の火が燃え上がるようお願い、何よりも主の絶大なる能力に全托することが大切であると。
本日、先生から、2007年京都キリスト召団発行の小冊子「聖霊・助け主・真理の御霊」
の紹介があった。聖霊降臨節集会の御講筵であり、熟読をお願いしたい。



(わが福音)

2019年6月16日
奥田昌道

この日は、司会を担当する方が、それぞれ都合がつかないとのことで、御所での早天祈禱会のようなつもりで、奥田が行うこととし、「わが福音」と題する講筵レジュメを配布して、それに即して話すこととした。以下は、その要約である。

1 神・キリストの前に、人間（自己）は如何なる存在か？

「義人なし、一人だになし」（パウロの告白）

聖書（新約聖書）に照らして、その光によって、はじめて、神・キリストの前に、自分が如何なる存在かが明らかになる。

聖書、キリストの言葉によって、はじめて、「生と死」の問題、キリストの十字架の奥義が、明らかにされた。コリント前書1章18〜31節

2 現在時点での自己認識の内容

① 「我、主と偕に十字架に付けられたり。我もはや生くるに非ず、キリスト（御霊のキリスト）わが内に在りて生き給うなり。（同時に「霊」なる）我もまた、キリストと偕に生くるなり」（ガラテヤ書2章20節）

② コロサイ書3章1〜3節

③ 詳しくは、ロマ書8章

3 生き方、生きる上での指針、目標、規準等

(1) マタイ伝6章25〜34節

「まず神の国と神の義とを求めよ」

ルカ伝では12章22〜34節

「ただ、父の御国を求めよ」

「汝らに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり。」

(2) ヨハネ伝3章3〜8節、同6章63節、同4章24節

(3) ヨハネ伝12章24〜25節、

「二粒の麦、地に落ちて死なずば……」

ルカ伝9章23節、同14章25〜27節、

「己を棄て、日々おのが十字架を負ひて…」

(4) キリスト告白の大切さ。ルカ伝12章8〜9節、マタイ伝10章32〜33節

(5) ピリピ書1章20〜25節

「我が生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり。」

(6) この世の人の生き方。ピリピ書2章21節、同3章17〜19節

(7) 我らの希望。ピリピ書3章20〜21節、コロサイ書3章3〜4節

(8) 我らの生き方。コロサイ書3章1〜4節、9〜17節、ピリピ書4章4〜9節、テモテ前書6章6〜8節



（我々の目標）

2019年6月23日

先生は、聖歌602番の

「昨日も今日も永久に変わりなきイエスの御言葉の慕わしき、
赦しと癒しを今日もなお、イエスは変わりなく与え賜う、

よし世の全ては変わるとも、変わりなきイエスに栄在れ」

の歌詞を生活の中で実感してくださいと講筵を始められました。

続いて、小池先生が1996年6月2日に行われた京都での最後のご講演（「靈愛」）の中で、

「キリストの靈は捨て身の愛の靈であり、これを受け取ると、キリストが乗り移って燃えざるを得ない。」

などと語られたことを紹介されました。それを受けて、我々がキリストの愛に触れてその分身とされた以上、我々の目標は、キリストから聖靈をいただき、キリストと同質の生命を生きることに、日々キリストと同じ愛の業をすることにあると語られました。

本論のルカ伝13章からは、次のように語られました。1節から5節の箇所について、東日本大震災のような理不尽なことに見舞われた時に、なぜ自分はこのような運命になるのかと問いたくなりますが、神様に対して自分でどうにもできない運命の理由を尋ねない。苦しみや悲しみの原因を知ったところで、苦しみや悲しみがなくなるわけではありません。聖書が教えているのは、苦しみや悲しみの中で、私たちが何を目指すのかということ。イエスは、生まれつき目が見えない人について誰の罪かと問われたことに對し、

「神の業が現れるため」

と答えられました（ヨハネ伝9章1節から3節）。我々のあらゆる判断基準の根本は、キリストにあります。我々が原因を遡って探してみても苦しみも悲しみもありません。むしろ、未来に目を向けると、そこから神様の業が現れますから、そのような危機に遭ったときこそ、神様を讃美して神様に立ち返ると、苦難を乗り越えることができます。

何があっても、我々の在り方は、神様の前にひれ伏すだけです。キリストに、御心だけを成就してくださいと祈り、勇気を持って全托してゆください。たとえば、我々の信仰が芥種一粒のような小さいものであっても、キリストの御言葉と聖靈をいただいたからには、大きく実を結んでゆきます。



(キリスト一筋で生きる)

2019年6月30日

この日の集会では、ルカ伝14章から16章までを中心に、主の御心を知るべく、先生と共に学んだ。先生もまた、主から学ぶ立場におられる。先生は、集会在主の聖霊によって豊かに祝福されたものになる為に、集会員一人一人が主から頂いた恵みを証言することを求めておられると思う。主こそ、聖霊によって我々を豊かに祝福したいと願っておられる。主は親鳥が羽の下に雛鳥を集めるように、我々を大事に思っておられる。視点を自分やこの世の現実に向ければ、思い出す事のほとんどが辛く苦しく悲しいものかも知れない。しかし、神・キリストの視点に立つて自分やこの世を見れば、主はどの様に自分やこの世をご覧になっておられるか、何を求めておられるか、どのような恵みをくださっているかに気付く。集会是集会員皆で作り上げるもので、皆が主にあつて幼子のように恰好を付けずに明るく生き生きと証言できれば、それが、そのまま世の光となる。そうすれば、集會に救いを求める人が集まり、主の祝福は一層増し加えられるに違いない。

ルカ伝14章12節以下では、主の視点を持たなければ、正確には理解できない主の言葉が続く(特に25節以下)。我々の靈的な成長の度合によって、理解の仕方は変化して行くだろう。理解できないものを無理に理解しようとしなくても、主にあつて成長していけば、自然と理解できるようになるのではないか。先生は、主の厳しい言葉に出会って、

「私(キリスト)から力と生命を頂いたのなら、私(キリスト)一筋で来なさい」

と受け取られた。何をさて置き、キリスト第一で行けば、主が万事を益としてくださると。主の厳しい言動は、神の義の厳しさでもあると思う。神の義の前には、生まれながらの間は誰も義人ではあり得ない事が明らかになる為に。だからこそ、我々は主に降参して、主から力を頂いてことが求められる。

ルカ伝15章の「放蕩息子」のたとえ話では、どんなに主の御心とかけ離れた生活をして、その生活に本当の生命も喜びもないことをご存知の主は、その生活を責めるのではなく、むしろ憐れんで、心底悔い改めて主に立ち帰って来た事を喜ばれた。

ルカ伝16章の「金持ちとラザロ」の話では、この世の利己的な幸福を求める人は、主の宴席にはそぐわないことが示されている。



(キリストとの出会い)

2019年7月7日

集会の初めに奥田先生は、63年前の7月7日、市川喜一兄からイエス様のことを聴き、その後、主キリストへの道を歩むようになった経緯を感慨深く話された。この日のキリストとの出会いが、先生の人生を決定的に変え、その後、キリストへ一切を委ねる生活へと変えられていったと話された。凡て主キリストの恵みであると。

聖日集会のルカ伝連続講筵は、ルカ17章を（部分的には18章も）マタイ伝にも触れながら学んだ。先生が注目された箇所とその講筵要旨を書いてみる。

1 「小さき者」（ルカ17・2、18・15〜17、マタイ18・1以下）

キリストは、おさな幼児の心で神の国を受ける者でなければ、神の国に入ることができないと言われた。先生は詩篇第8篇2節の、

「おさななんじは嬰兒、乳飲み児の口により力の基もとをおきて」

を引かれ、母の胸に抱かれて眠る乳幼児のようにキリストに全托する者にこそ神・キリストの栄光が顕われると話された。

2 「赦し」（ルカ17・3、マタイ18・21以下）

ここでは、罪を犯した兄弟に対して心から兄弟を赦すことの大切さを学んだ。ルカ7章36節以下の、キリストの御足に香油を注いだ罪ある女の記事と、2人の債務者の記事にも触れ、私たちも神様に多く赦されたものとして、イエス様に何をしていたか、その原点をいつも忘れないように、と語られた。

3 「芥種一粒の信」（ルカ17・6）

信仰を量的なものと考えていた弟子たちに、キリストは、量ではない質だと言われた。自分の思いを乗り越え、キリストの御言葉を「然り」と受け取ること。古い自分は既に十字架の上で死んだ者であり、新しく天の次元を賜って霊なる人として生きる者とされていること（ガラテヤ書2章20節以下）に気付くことが大切だと。

4 「十人のらい病人の話」（ルカ17・11以下）

イエスの言葉に素直に従って行動したららい病人、そこに御業が成就した。キリストは、喜び帰って来た一人のらい病人（他国人）に、

「幼子幼子の心で私に委ねたあなたの信が、あなたを変えたのですよ。」

と語りかけているようである。キリストは、私たちに、

「私（イエス・キリスト）が神の国だよ、私はいつもあなたと共に居るよ、集会の中に、一人びとりの生活の中に、いつも居るからね」

と言つてくださっている。



(主の道を歩む)

2019年7月14日

奥田先生は、集会員の目が開かれるように、間違ひなく主の道を歩むように、聖書が本当に読めるようにと、熱く語られる。ご自身が学んで来られたこと、確信しておられることの全てを出し切るように語られていると感じる。

先生は、あの世に召されても我々の為に働くと仰る。この世の束縛から解放されて主に迎えられる、幸子姉や翔君達と再会し、永遠の歓びと生命に溢れて働かれるに違ひない。そう考えると、きつと小池先生も今も我々に対して働きかけておられるのではないだろうか。我々は、その身に降りかかる艱難・苦難に顔を背けることなく、それらを乗り越えるべく主から力を頂いて、主の十字架を担って、雄々しく人生を全うした暁には、居並ぶ天使たちと共に、主が、

「よくやった。忠実な僕よ、天国を共に受け継ぎなさい。お前の為に用意したものだ」と抱きしめてくださるに違ひない。

「神は、自ら助くる者を助く」…自立心を持つて必死で生きて、それだけではどうにもならないところで、キリストが必要になる。苦難の果てにキリストの有難さが分かる。

「靈力的宗教か道念的福音か」…靈力的宗教は、靈的傲慢に陥り、およそキリストの福音とは正反対のものとなる。道念(求道)的福音を貫くには、自己義認(神の前に己を正しいとする)に対する徹底した否定が必要。しかし、生来の人はどうしても神の前に自己義認してしまう。だから、神の律法やキリストの厳しい言行が無理難題に思えて仕方がない。キリストは、神の前に自己義認されなかった。神の御心をご自分の心として、十字架の死に至るまで従われた。必要なことは、「自分には出来ない」と気付き、主に降参すること。主に降参し、謙虚にならない限り聖書の扉は開かれなないと小池先生は語られた。

主は、人類を自己義認という根源的な罪から解放する為に、十字架をその身に負ってくださった。主が十字架を負ってくださらなければ、天が開かれることはなく、従って誰も天的な歓びや生命を味わうことは出来ない。そのような主の十字架を感謝して受け取れば、我々は自己義認から解放されて、靈的根源現実としては罪なき義人とされる。そして、我々も歓びをもって主の十字架をとるのである。

「もはや我、生くるにあらず。キリスト、我が内に生きたもうなり」(ガラテヤ

2・20)

がスタートライン・土台であると、奥田先生は繰り返し強調された。



(主様と一如)

2019年7月28日

「まず、神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらる

べし」(マタイ伝福音書6章33節)

まず、主様の視点(主様が主役)で人生を新鮮に見つめるなら、主様があなたに願っておられる素晴らしい人生を見出すことができます。

主様のやり方に倣うなら、主様があなたのために計画してくださった本当の人生を経験することができません。

先生は、召団員に本当の道を示すために講筵されました。

先生がお教えになった義とは、心と生活とを主様の御意のあらわれに直結させることです。また、神の国と神の義とはイエス・キリスト様そのもので、イエス様の中(エン・クリスト)にすべてが包摂されています、と仰いました。

「聖書の現実」は 次元の高低

み霊のたばしる 生命の世界

聖旨のまにまに わが業をなし

主に在る生きざま 貫き往かん」(小池辰雄作「使徒らの昔を」の1節・4節)

地上で最も確実な生命保険(神の国)は、イエス・キリスト様とつながること(一如の相)です。主様と一如であるなら、あなたに失敗はありません。

あなたが主様と結んでいる契約が、祝福を保証するからです。 平安

〔註 B2 「使徒らの昔を」(1979.12.9)(讃美歌359「夕陽はかくれて」の曲で)

1. 使徒らの昔を慕いて我は、聖書に読み入り祈りてあれば

《おりかえし》

み霊の我が主はわが身を抱き、十字架に耐え得る力を賜う。

2. 聖書の現実うつつは次元の高低いのち、み霊のたばしる生命の世界。

3. 主の日をまもりて戦いあれば、聖霊も呻なげきて執り成し給う。

4. 聖旨のまにまにわが業をなし、主に在る生きざま貫き往かん。

5. わが世の旅路も日暮を迎え、夕の鐘の音ね 暮韻ぼいんじょうじょう 嬋々。

6. 終末の峠おわりを踏み越え進み、星のしるべにて嶮路を往かん。

7. 常世とこよの晨あしたの明るるときには、天使天降りて昇らせ給え！」



（まず神の国と神の義を）

2019年8月2日

2019年7月28日（日）の「集会だより」は、司会者のM兄に代って奥田が作成することとなりました。

集会の最初に、奥田は、小池先生からお聴きした覚如上人の歌、

「南無と言へば 仏来にけり 此の一つ身を 我とや言はん 仏とや言はん」

を引いて、我々クリスチャンは、この歌以下であったら、主キリストに対して申し訳ないと話しました。「南無」は、「帰依帰入」（帰入は祈入にも通じる）の意。我々は、

「南無キリスト！ 南無主さま！」

と主キリストに呼びかければ直ちに「主キリスト（御霊のキリスト）」と一つにして頂ける。

「我、キリストのうちに。キリスト、我がうちに」

の霊的現実に入ることが出来る。主キリストは、それを望んでいてくださる。そのために、十字架にかかつて、我々の罪（自己執着。神・キリストよりも、自分を第一とする在り方）を十字架で片付けてくださった。

「我、主と偕に十字架につけられたり。最早、我生くるに非ず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がため

に己が身を捨て給ひし神の子を信受するに由りて生くるなり。」（ガラテヤ書2

章20節）

を自分自身の告白として日々を生きる。こうして、奥田が本年の課題とした、「聖書を生きる、キリストを生きる」が現実となるでしょう。そのような日々であるならば、「感謝、讚美、祈り」の中で過ごすことになり、日曜日の集会ごとに、「感謝、讚美、祈り」の証言が続出することになるでしょう。

講筵の題目は、「まず神の国と神の義を！」。「神の国」も「神の義」も、イエス・キリストご自身の中に来ていますから、

「神の国と神の義とを求めよ」

とは、「私（イエス）を求めよ」であり、それも、「まず」なのです。「何はさておき、まず第一に」なのです。我々は、ともすれば、自分の考え、自分の境遇、自分が直面している問題など、「自分」から出発しがちです。それに対して、主キリストは、「まず、主キリストを求めろのだよ」と呼びかけておられます。そして、我々が必要としていることを、すべてご存知で在り給います。「主さま、主キリストさま！」といつも、主の懐に飛び込んで行く、それを主は望み、待っていてくださいます。



(聖書における『自由』、キリストの賜う『自由』)

2019年8月4日

今日は、「聖書における『自由』、キリストの賜う『自由』」と題して聖書における「自由」とは何かについて語られました。自由には、

- ① 「くからの自由(消極的自由、liberty from)」
- ② 「くへの自由(積極的自由、liberty to)」

の二つの側面があります。聖書においては、

- ①の自由は、束縛からの解放、罪からの解放を意味します。
- ②の自由は、愛への自由、すなわち、神様に愛されているゆえに、人を愛し、人に命を与える使命を果たす自由を意味します。

①の自由は、キリスト抜きでは得ることはできません。私たちが①の自由を得るためには、十字架が必要です。キリストが、

「私がお前の全てを引き受けた」

といわれる十字架の事実を真剣に受け取ることによって、あらゆる束縛から解放されて本当の自由を得ることが出来ます。

十字架によって古い自分に死んで、①の自由を得ることが出来ると、次は、キリストを讃える愛が燃えてきて、②の愛への自由に至ります。

このように、キリストは、私たちに二つの自由を与えて、私たちがキリストの証人としてこの世で働いてゆくことを願っておられるのです。

先生は、昭和31年夏にオズボーン宣教師の集会での原体験(束縛からの解放、自我からの解放)があったからこそ、現在の自分があると語られました。自分が全てを背負わなければならぬと思っていた時には苦悩の連続であったが、十字架を受け取って初めて、光の中で生命の道を歩むことができるようになり、精神的な病も消えたと語られました。しかし、クリスチャンになったから、悩みが全てなくなる訳ではありません。生きていく以上、次から次と艱難はやってきます。その時には、絶えず原点に立ち返ることです。自分に都合の良い神様を求めているか、キリストご自身を求めているかを絶えず問いかけて、あらゆる艱難をキリストに預けてください。そうすれば、艱難に対する答えのみならず、大きな平安と慰めが与えられます。目に見える運命環境を乗り越えて、その奥にある神様の光と啓示を受け取って前に進んでください。御霊にあつて意気盛んな者として生きてください。これが私の願いです。

引用聖書(詩篇19篇、マタイ6章25節以下、イザヤ書30章15節、ヨハネ伝14章1節以下、15章16節、ヨハネ第1の手紙3章、コロサイ書3章、コリント後書3章17節、18節、ガラテヤ書5章1節から14節、6章7節、14節、詩篇46篇)



(善き業を始め給いし者)

2019年8月18日

集会の初めに聖歌638番「やがて天にて」を高らかに歌った。

1番 「御国に住まいを備えたまえる、主イエスの恵みをほめよ讃えよ」

4番 「目当てに向かいて馳せ場を走り、輝く冠りを御殿にて受けん。

やがて、天にて喜び楽しまん。君にまみえて勝ち歌を歌わん」

主キリストは、私たちのために天に御国を備えて待っていてくださる。この歌は、その日の喜びを心の目でしつかり見つめ、地上での日々の業に励もうと勧める明るい歌だ。

今日の講筈は、ピリピ書から御言葉を学んだ。ピリピ書は、パウロがピリピの兄弟姉妹に書き送った愛あふれる勧めの言葉で一杯だ。以下、奥田先生が注目した御言葉とお話の要旨を書いてみる。

1 「我は汝らの衷うちに善き業を始め給いし者(神様)の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給うべきことを確信す。」(ピリピ1・6)

この箇所で先生は、復活の主イエスが栄光の主としてお出でになる日を待ち望み、私たちも福音に相応しく日を過すごそうと勧められた。

2 「生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇あがめられ給わんことを切に願ひ、……我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」

(同1・20、21)

一般的に日本人の信仰は自分の為に神様を利用している。しかし、そうではなく、「キリストのための自分」なのです。主は私たちを「生命の御霊の法」によつて新しい人にプロデュースしてくださったのだから、もはや自分を問題にすることはありません。

「まづ神の国と神の義とを求めよ」

で貫いていきましょう。

3 「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は……」(同2・5〜9)

主様、あなたは私に何を望み、どんな御意を持っておられますか、それを教え導いてください、といつも祈り心でいることです。私たちは、主からこの世に遣わされたいわば「派遣社員」です。派遣された方の御旨を第一に生きていきましょう。

4 「なんじらつぶやかす疑わずして、凡ての事をおこなえ。」(同2・14)

「汝らは生命の言を保ちて、世の光のこゝろとく此の時代に輝く」(同2・15)

つぶやき、疑いは危険信号。キリストの導きに全身全霊をゆだねること。最後に先生は、今週末に迫った夏季特集に向けて、キリストに燃やされて集會に臨んでくださいと述べ、祈りの火が燃え上がる祈りの集會であつて欲しいと話された。



(主を悦ばせんが為に)

2019年9月1日

「凡てのこと主を悦ばせんが為に、その御意に従ひて歩み、凡ての善き業によりて実を結び、いよいよ神を知り」(コロサイ書1章10節)

「イエスはわがいのち また喜び すべてのおすべてぞ われにとりて

悲しめるときは 慰め励ます 世にただひとりのお友ぞ。

イエスは火の如き 試みにも 勝たせて恵みを さらに賜う

日々なす業をば 祝して実りを 豊かになし給う友ぞ。」(聖歌608番)

主キリスト様は目に見えない父なる神様に生き写しの方であり、事実、キリスト様は、すべてのものの創造者であられます。キリスト様は、他のすべてのものに先立って存在し、すべてのものは、キリスト様(霊界の太陽)によって成り立っています。キリスト様の内には、素晴らしい知恵と知識の宝が、そっくり隠されています。なぜなら、キリスト様の内にこそ、父なる神様の御性質のすべてが、肉体をとって宿っているからです。ですから、キリスト様と一如に成っているなら、すべてを手に入れたこととなります。そして、キリスト様と結びつくことによって、御霊に満たされます。キリスト様は、すべての力を従えた、権威ある根源的存在者であられます。

奥田先生のコロサイ書講筵を通して、すべてのすべてなる主キリスト様をますます深く知るに至りました。

本日の集会は、皆が喜びと感謝の証を持ち寄ったの集いとなりました。 感謝



2019年京都夏季福音特別集会 資料

「祈り」の視点からの「み言葉集」

奥田昌道

マタイ伝より

- 4・1～4 「人の生くるは、神の口より出づる凡ての言ことばに由る」(ルカ4・1～4)
- 4・7 「主なる汝の神を試むべからず」(ルカ4・12)
- 4・10 「主なる汝の神を拝し、ただ之にのみ事つかへまつるべし」(ルカ4・12)
- 4・17 「汝ら悔い改めよ、天国は近づきたり」(マルコ1・14～15)
- 4・19 「我に従きたひ来れ、さらば汝らを人を漁すなごる者となさん」(マルコ1・16～20、5・1～11)
- 5・3～5・12 「恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」(ルカ6・20～26)
- 5・43～48 「天の父の全まったきが如く、汝らも全かれ」(ルカ6・27～36)
- 6・5～8 「祈る時、戸を閉じて汝の父に祈れ」
- 6・9～15 「主の祈り」(ルカ11・1～13)
- 6・19～24 「己がために財宝たからを天に積み(ルカ12・33～34)
- 「汝ら、神と富とに兼ね仕ふること能はず(ルカ16・13)
- 6・25～34 「何事をも思ひ煩ふな、汝らの天の父は汝らに必要な物を知り給ふ。まず、神の国と神の義とを求めよ、必要なる物はすべて添えて与へられん。この故に明日のことを思ひ煩ふな、一日の苦勞は一日にて足れり」(ルカ12・22～34)
- 7・7～12 「求めよ、さらば与えられん……(ルカ11・9～13)
- 7・13～14 「狭き門より入れ、生命いのちに至る門は狭く、その路は細く、之を見い出す者少なし」(ルカ13・23～24)
- 7・21～23 「我に向いて主よ主よと云う者、悉ことごとくは天国に入らず、ただ天に居ます我が父の御意もよこしを行う者のみ之に入るべし」(ルカ6・46～49)
- 8・5～13 「主よ、わが僕、中風を病み、家に臥ふしいて甚いたく苦しめり、ただ御言みことばのみを賜へ、さらば我が僕は癒えん。行け、汝の信ずることく汝に成れ!
- 此の時、僕、癒えたり」(ルカ7・2～10)
- 8・23～27 「イエス、眠り居給ふ」(8・24)、(マルコ4・35～41、ルカ8・22～25)



- 9・1～8 「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」(9・2)、(マルコ2・1～12、ルカ5・17～26)
- 9・9～13 「健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す、我は正しき者を招かんとに非で、罪人を招かんとて来れり」(マルコ2・13～17、ルカ5・27～32)
- 9・19～22 「御衣の総ふかにだに触らば救はれんと心のうちに言へるなり」(マルコ5・25～34、ルカ8・43～48)
- 9・23～26 会堂つかさ司の娘の癒し…
- 「わが娘、今、死にたり、されど来りて御手を之に置きたまはば活きん」
「タリタ、クミ！」(マルコ5・21～43)
- 「恐るな、ただ信ぜよ！」(ルカ8・41～56)
- 10・1～42 「十二使徒を選び、伝道の心構えを語り給う」(マルコ6・7～13、ルカ9・1～6)
- 11・25～30 イエスの祈りと天よりの応答(ルカ10・21～24)
- イエスの呼びかけ、「凡て労する者、重荷を負う者、我に来れ……」
- 14・22～24 パンの奇跡の後、「山に登り、祈り居給う」
- 14・25～33 湖上を歩み給うイエスとペテロの叫び、イエスの応答
- 「心安かれ、我なり、恐るな！」(マルコ6・45～52、ヨハネ6・16～21)
- 16・13～20 「汝らは我を誰と云うか？」
- 「汝はキリスト、活ける神の子なり」(マルコ8・27～30、ルカ9・18～20)
- 16・21～28 受難の告知と弟子たる者の心構え、
- 「己を棄て、己が十字架を負いて、我に従え！」(マルコ8・31～32、ルカ9・22～27)
- 17・1～8 山上の変貌。
- 「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聴け」(マルコ9・2～8、ルカ9・28～36)
- 17・14～21 「芥種からしだね一粒ほどの信仰あらば、……」(マルコ9・14～29、ルカ9・37～43、ルカ17・5～6)
- 18・1～14 いと小さき者への顧み。
- 「おきな幼児の如くならずば」(マルコ9・36～37、ルカ9・46～48、ルカ17・1～2)
- 18・19～20 「二人、何にても求むる事につき地にて心を一つにせば、天の父は之を成し給うべし。二、三人わが名に由りて集る所には、我もその中に在るなり。」

- 18・21～35 「幾度赦すべきか、七度までか？」「否、七度の七十倍まで！」（ルカ17・4）
- 19・13～15 「幼児らの我に来るを止むな、天国はかくの如き者の國なり」（マルコ10・13～16、ルカ18・15～17）
- 19・16～30 「永遠の命を得るためには、何を為すべきか？」
- 「富める者の天国に入るは難し」（マルコ10・17～31、ルカ18・18～30）
- 20・17～28 受難の告知と弟子たる者の心得（マルコ10・32～45、ルカ18・31～34）
- 21・12～17 「わが家は祈りの家と称えらるべし」（マルコ11・15～18、ルカ19・45～46）
- 21・18～22 「祈りのとき、何にても信じて求めば、ことごとく得べし」（マルコ11・12～14、11・20～26、ルカ17・5～6、ヨハネ第一書5・14～15）
- 22・34～40 最大の戒律..
- 神への愛、人への愛（マルコ12・28～34、ルカ10・25～37）
- 24・1～51 エルサレムの滅亡と世の終りに関する預言。
- 「天地は過ぎ行かん、されど我が言葉は過ぎゆくことなし。終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし。目を覚ましおれ」（マルコ13・1～37、ルカ19・41～44、ルカ21・5～36）
- 26・30～44 オリーブ山、ゲッセマネの祈り（マルコ14・26～42、ルカ22・39～46）



（最も尊敬する人物の一人）

2019年9月8日

石田衡平君がこの世での役割を全うして天に迎えられた。不自由な肉体に生まれたことに何の不平を言うこともなく、あるがままを受け入れ、沢山の人に愛され、沢山の人にキリストの愛の偉大さを伝える事を喜びをもって実践した生涯であった。石田H姉は、

「衡平を支えているように見えて、支えられていたのは自分の方だった」

と話された。奥田先生は、衡平君を「最も尊敬する人物の一人」と評された。彼や翔君達のお蔭で、奥田先生のキリストへの信仰の質が深まったことを考えると、

「主にある者には、全ての事が相働いて、益となることを我らは知る」

ことを思う。主にある者には、全てが良いことの為にあり、衡平君は、主にあつて立派に役割を果たしたのだ。

石田H姉が今回から集会に加わってくださった。H姉のキリストへの霊的な信仰の深さは、奥田先生も認めるところであり、大変強力な味方が加わった。京都召団は、やはりキリストが立てられた、主の偉大な御計画の中にある群れだと思わずにはいられない。

講筈において、奥田先生は、この世は「双務有償（等価値交換）」の世界だが、神・キリストの愛は「片務無償（与えるばかりの愛）」の世界である、と話された。

「すべてのものを あたえしすえ、死のほかなにも むくいられで、

十字架の上に あげられつつ、敵をゆるしし この人を見よ。」（讚美歌121番3節）

キリストがどのような方であったかは、議論して頭で分かるものではない。実際にキリストに倣って、キリストのように生きようとする者だけが、聖霊の導きの下、

「神は愛であり、その愛は、御子キリストを我々の不義を除く為に十字架に渡されるほど、底抜けのものであった」

ことが体で分かる。この世は、肉（自己中心）と霊（神中心）の戦いが常にあり、肉に負けることなく、神の御心を求め、キリストと一つとなって、隣人を自分のように愛することによって、我々は霊的に成長して行く。霊的成長の度合いに応じて、聖書や福音に対する疑いの余地は無くなっていく。

奥田先生は、

「聖書は、神の根源語であり、聴くものである」

として、聖霊の導きの下で受け取るべきことをしっかりと受け取って行くことが大事であると話された。

我々は、互いに助け合い、祈り合う中で、福音の世界をこの世で実現していきたい。



（衡平君の昇天を通して）

2019年9月15日

奥田先生は、最初に、衡平君の昇天を通して集会が新しい段階に至ったと証言されました。
イザヤ書57章15節に、

「至高いとたかく至上いとたうえなる永遠とこしえに住める者、聖者となづくる者かく言いたもう。我はたかき所、きよき所に住み、また心砕けてへりくだる者とともに住み、へりくだる者の霊を生かし、砕けたる者の心を生かす。」

とある現実が、この集会にも臨んでいるのです。

生まれながらの私たちは、天の高い次元とは交わることができませんでしたが、キリストが十字架にかかられ、復活され、神様の霊が私たちに降り注ぐことによつてそれが可能になりました。私たちがどのような姿であつても、キリストの方から迫つてこられたのであるから、

「私はまだ受け入れることができません」

と拒むことはできません。私たちが神様に対してどのような反抗しようとも、それは既に十字架で片付けられています。全ては恵みであり、全てはキリストが用意しておられるので、私たちは、素直に

「はい。有り難うございます」

とひれ伏し、

「我キリストのうちに、キリスト我がうちに」

の現実を受け入れれば良いのです。

キリストを受け入れても、この世の現実は、試練の連続です。しかし、試練は、ヤコブ書1章1節から7節、12節にありますように、私たちを完璧な人にさせるために与えられているのです。たとえ試練や艱難に出会つても、それに執着することなく、

「主様。あなたは全てををご存知です。全ては恵みです。全ては感謝です。どうかこの試練を乗り越える力を与えてください。あなたの御旨のままに導いてください。」

と全托してゆくと、この世の煩いも、いつしか天の高い次元の中に解消されて、天来の平安と慰めが与えられます。すなわち、この世の全てのこと相対化されて「天地一如」の事態になるのです。

引用聖書（ヨハネ伝6章、14章、イザヤ書61章、62章、ヨハネ黙示録7章9節から17節）



(内なる人は日々到新)

2019年9月22日

9月の下旬を迎えてやつと朝晩が涼しくなった。夜は虫の音が心地良く、季節は秋に向かっている。

今日の聖書講筵で先生は、私たち、主キリストの栄光を顕す者とされているが、そのために自分の能力ちからに頼るのではなく、キリストに凡てお預けすることが大事であり、そのことをパウロがコリント後書で書いてくれていると話された。以下、今日の講筵タイトルに従い、注目した御言葉を追ってみたい。

「神は何時いつにてもキリストにより、我らを執とらえて凱旋し、何処いずこにても我等によりてキリストを知る知識の香をあらわし給う。」(コリント後書2・14)

先ず神、キリストの側が私たちを導いて勝利させてくださる。かくして私たちは、キリストのかぐわしい香りを放つ者とされ、人を生命いのちへと導く存在として頂ける。

「我等この宝を土の器もに有もてり、これ優れて大いなる能力ちからの我等より出でずして、神より出づることの顕あらためなり。」(同書4・7)

この宝つまり「聖霊」が私たちを輝かせ、人の思いを超えた能力を発揮させてくださる。ひれ伏してこの身を差し出す以外に無い。

「我らが外なる人は壊やぶれるれども、内なる人は日々あらたに新なり。……我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。」(同4・16、18)

見える処や現象面に囚われ、振り回されること無く、コリント前書10章13節の神の真実を然りとし、遁れの道を備えてくださっていることを信受すること。

「人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。」(コリント後書5・17)

先生は、この御言葉がロマ書8章1、2節の御言葉と響き合っていると話された。キリストイエスに在る「生命の御霊の法」は、私たちを新しくせずにはおかない。

結語…このようにキリストの栄光を顕す者とされた私たちは、コリント後書6章にあるとおり、見える所を突破し、生ける者、常に喜ぶ者、多くの人を富ませ、凡ての物を持つ者として頂いた。日々、感謝、讚美をもって主の事わざにつとめたい。



(聖霊の感動)

2019年9月29日

「肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり」(ヨハネ福音書3章1から15節)

人間がどのくらい主様を制限しているのだろうか。自分を基準に制限する。自分ができなければ主様もできないと思う。これが、人間が持っている弱点です。その人に、みことばをやみくもに伝えたからといって、そのまま伝わるわけではない。

聖書は聖霊の感動によって記録された書なので、先生の朗読のように聖霊の感動によって読んでこそ、主様のみことばを感じ、その御力を経験できる。

奥田先生の講筵は集会の心臓です。礼拝がささげられる時、召団なるキリストの体で心臓がしっかりと動く。心臓がしっかりと動けば毛細血管まで血が行き渡り、病にかかっても大丈夫です。血液循環がよければ治る。病というのは、血液循環が隅々まで行き渡らず、特定部分が死ぬことです。礼拝がしっかりとささげられれば、召団の隅々まで生き返る。

このように、主様のみことばそのものが、聖霊の感動によって朗読されれば、礼拝が生き返る。もちろん、讚美も重要だし祈りも重要だが、礼拝の鍵は主様のみことばです。主様のみことばに、どのような意味があるだろうか。それは主様という意味がある。主様は目に見えない。主様の体は肉ではなく霊だからです。時間と空間に制限されない。では、私たちは主様の臨在をどのように感じることができるのだろうか。キリスト様御自身である御言葉を通して主様を感じることができ。従って、私たちは聖書を読み、聞き、暗唱し、黙想し、それを実生活に適用させる必要がある。そのとき主様を経験し、臨在意識が宿られます。アーメン



(十字架、聖霊はワンセット)

2019年10月6日

奥田先生は、この9月にお元気で87歳の誕生日を迎えられた。先週の食事会の場で、兄弟姉妹からささやかなプレゼントの贈呈があった由。健康を守られ、いつまでも福音の良き語り部としてお過ごしくださることを皆さんが祈っている。

その先生が、今日の講筵の初めに、「奥田の事はどうだつていいのです。キリストが皆さんに何を願っていらつしやるか、その事を第一にしてください」と言われた。更に先生は、「私の奥（背後）にあるキリストに目を注いでください」と言われた。

講筵では、先ず「主の祈り」について注目した。キリストは、父なる神様の事を第一に祈るように教えてくださっている。先生は講筵で以下のように話された。

「主の祈りは十字架、聖霊の土台に立つて初めて祈ることができる。それはガラテヤ書2章20節を全身で受け取り、十字架で自分が本当にゼロ（無）とされていることを信受することである。キリストの十字架に由って清められた所にこそ、間髪をいれず主の聖霊が臨む。したがって、「十字架、聖霊はワンセット」であり、「十字架、十字架」とだけ言っているのは不十分、「霊」のこと「靈力」のことばかりでは危険だ」

と。続いて先生は、パウロがエペソの教会の長老たちに語った別れの場面を引かれた（使徒行伝20章17節以下）。今、京都の集会の一人一人にあてられた御言として、この箇所を深く話された。長い箇所なので聖句の十分な引用は出来ないが、パウロは、

「謙遜の限りをつくし、……主イエスに対して信仰すべきことを證し、……」

年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝らのおのをおのを訓戒せしことを憶えよ」と述べた。更に

「われ今なんじらを、主および其の恵の御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに**嗣業**を受けしめ得るなり」

と告げた。涙なくして読めない場面である。先生は、その他ヨハネ伝14章から17章、ロマ書3章21から31節及び同8章を深く読むよう話された。

聖日集会は、讚美歌の斉唱から兄弟姉の証言、先生の講筵、終わりの祈りまで、主の導きに委ね、一回限りのもので再現は出来ない。聖霊の働き、語り手の表情、力の入れ具合など、その様子を体で受け取るにはその場にいることが大事で、録音等では十分でない。遠方の方は制約があり参加が難しいが、出来る限り機会を作って生の聖日集会の講筵を聴き、祈りを共にする場を心掛けて欲しい。キリストが、先生を介して、これだけはどうしても伝えたいし語っておきたい講筵のシリーズが始まっているから。



(第二の創造)

2019年10月20日

ラグビーワールドカップの日本代表の挑戦が、終わった。史上初のベスト8という快挙を成し遂げた。彼らのひたむきに戦う姿に感動した人も多いのではないだろうか。ラグビーは、対戦相手を単に敵と見るのではなく、互いに高め合う存在として尊重し合うという文化がある、非常に精神性の高いスポーツだ。台風19号の被災者に元気と勇気を届けたいという、彼らの偽りのない崇高な気持ちも彼らの活躍を後押ししたのだろう。血の滲むような訓練を自ら望み自らに課した彼らの生き方に、大いに共感し刺激を受けた。我々には主がおられる。主と一つとなつて力を頂き、どんな困難にもくじけず、炉で精錬されるように自らを鍛え上げたい。主よ、どうか我々一人一人をそれぞれらしく、愛と思いやりに溢れた主の勇者として鍛え上げてください。

集会では、イザヤ書40章を中心に、幾つもの大事なことや勇気を貰える御言葉を、先生のメッセージと共に学んだ。

ヒルテイーの言葉：

「自ら頂いたものを、一旦神にお返しして、そこから再び頂けば祝福される」

「年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし主を待ち

望む者は新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることが出来る。

走つても疲れることなく、歩いて弱ることはない。」(イザヤ40・30～)

「恐れるな、わたしがお前をあがなった。わたしがお前の名を呼んだ、お前は

わたしのものだ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、こ

れを仕立てた。この民は、わが誉れを述べさせるために、わたしが自分のた

めに造つたものである。」(イザヤ43・1、7、21)

主が先に我々に手をつけておられた。主の御業・選び・救いなら、神の御計画の完成まで我々の使命は終わらない。主は我々に自由意思を与えておられる。奴隷のように強制されてではなく、我々の自らの意思を伴った心からの神への感謝・讚美を求めておられる。

神の前に生まれながらの姿で、自分は完全に正しいと胸を張って立てる者は一人もいない。義人なし、一人だになし。しかし、お前のどんなマイナスも、わたし(キリスト)が十字架でお前の代わりに罰せられたことで、お前は完全に赦された。このわたしの愛を受け取って欲しい。そして、根源的な推進力を与えたい。それが、神・キリストの栄光となる。我々は、神・キリストの栄光の体現者として、第二の創造を頂いたのだ。



(イエス・キリスト直伝)

2019年10月27日

「兄弟よ、われ汝らに示す、わが傳へたる福音は、人に由れるものにあらず。

我は人より之を受けず、また教えられず、唯イエス・キリストの黙示に由れ

るなり」(ガラテヤ人への書 第一章 11-12節)

「わが福音」は、どこからきたのか？

イエス・キリスト直伝です。直々にレイマ(かたられていた言葉)として授かりました。

先達預言者たちのロゴス(かたられた言葉)からでは在りません。

主様は、私たちを再び御自分の子にしてくださいました。

天国の家族の一員として新しく生まれた者に与えられているすべての特権を、取り戻すための道が開かれたのです。

私たちを死の呪いから救い出すために、主様から引き離されることがないために、キリスト様は、ご自分の命を与えてくださいました。私たちの罪の罰を身代わりに受けてくださいました。それゆえに、罪意識、罪悪感、恐れ、劣等感を持たずに再び立つことができのです。それこそ人間が心の底から切望しているものなのです。

けれども、もし私たちが主様の贖いの御計画を聞かされていなければ、自責の念や罪意識は、依然として私たちを苦しめ続けるのです。この世に偶然に生まれて背負わせられた運命・さだめ・環境・因縁因果・先祖(アダム)からの呪い・どんなことをしてもぬぐい去れなかった罪と罪意識によるコンプレックスは、十字架でぶつとばされ無にされなければなりません。そして間髪入れずに聖霊様がお宿りになる。それだけが答なのです。



(聖書は主と出会う書)

2019年11月3日

秋の静かな聖日に、少人数ながらも、兄弟姉妹が集まり、主様に祈りを捧げることができましたことに感謝いたします。

先生は、イエスが、

「汝らは聖書に永遠の生命ありと思ひて之を査^{しら}ぶ。されど、この聖書は、我につきて証^{あかし}するものなり。」(ヨハネ伝5章39節)

とある箇所を読まれ、私たちに對し、

「新約聖書は、あなたにとつてどのような書ですか？」

と問いかけられました。その答えは、「生命のみ言葉」、「霊の食物」、「人生の道しるべ」など、人それぞれであると思われませんが、根底にあるのは、

「聖書は、主と出会う書、主の御心、御愛を体感する書なのです」

と。福音書は、記述自体は過去の物語ですが、実は現在に生きている物語です。聖書は、聖霊の働きによつて書かれたもので、それを読む時にも、聖霊の働きによつて主キリストと出会う深い交わりを持ちつつ、主が自分に何を語っておられるかを考えながら読むことが必要です。そうすると、聖書は、遠い国の過去の物語ではなく、どの箇所も現在の自分について語られており、

「驚嘆驚倒して読むべき書」(小池辰雄先生の言葉)

であることに気づかされます、と。

先生は、最近のご講筵において、しばしばこのような質問を投げかけられます。

そこには、いつも、「神様から何かをしていただく」ことを期待することを超えて、

「主様、あなたは私に対して何を望んでおられますか。どうかその道を示してください。

さい。自分の願望ではなく、主様の御心を我が心とさせてください。主様の御心が人々に流れてゆくように、働かせください。」

と、絶えず主キリストに視点をおいて、祈りながら生きて行く。「皆さんはどうですか?」と。私たちも、先生の問いかけを真剣に受けとめて、現実にとらわれないで、現実の奥に主様が用意されているご計画とご加護を信じて、勇氣と希望を持って歩んでゆきたいと思えます。本論(エペソ書)は、先生のご都合で次回になりました。



（御霊の賜う一致）

2019年11月10日

木の葉が黄色、紅色に染まり秋本番を迎えた。主キリストの御意を想い、みこころ恩恵に心を温め、祈りを深めるには良い季節である。

先週に引き続き、エペソ書を学ぶ。奥田先生は、はじめに、エペソ書の幾つかの特色を次のように話された。この書は、神様が天地創造の前から私たちの救いを御計画くださり、将来、その救いが実現していくプログラムが書かれているスケールの大きい書である。さらに、エペソ書には「一つ」、「一つ」と繰り返し出ているが、二つのものを一つにし、「二つのもの」が一体となり、一致することが書かれている。それは「天に在るものと地に在るもの」、「ユダヤ人と異邦人（私たち）」を一つにし、キリストと一つ思いになることで、キリストの十字架のあがないが根底にあると。

続いて先生は、エペソ書の中身に入られ、以下のように話された。その一部を紹介する。まず、2章4節〜10節までの箇所。キリストは、御自分の「義」を私たちにプレゼントしてくださいました。それに値しない私たちのマイナスを全部吸い取ってくださいました。十字架抜きで神様の前に立ったり受け入れて貰おうとしたりするのは無理。まずキリストの「恩恵」めぐみが先行していると。

次に2章15節以下で、キリストが敵意なる隔ての壁を取り壊し、「一つの新しい人」を造ったとある。この箇所では先生は、新しい人の創造はキリストの十字架を本当に受け取ることにより実現するもので、そのような人こそ平和を創り出す者であると（詳細はエペソ書4章、なおコリント後書5章17節も参照）。また、3章14節以下のパウロの私たちに對する祈りの箇所では、

「愛に根ざし、愛を基とし……」

とあるが、パウロは、キリストに充滿している「愛」が私たちにも充滿するようにと祈っている。その根底には十字架があり、十字架を深く受け取った処に「愛の霊（聖霊）」が臨む。ガラテヤ書2章20節以下を深く受け取ること、エペソ書4章4節以下の「御霊の賜う一致」のために、私たちの中に聖霊の火がいつも燃えていること、その根底には十字架があり、十字架と聖霊は一体であることを熱く語られた（ルカ伝12章49節参照）。

夫と妻の関係に関し先生は、何よりもキリストの導き、支えが必要であること、聖日集会が大事であり共にキリストの前で祈ることの大切さを話された。キリストを知らない人に、家庭での生活ぶりを示すことによりキリストを伝えることも大事だと。



(新生命を賜わった者)

2019年11月17日

「又わが口を開くとき言を賜はり、^{はばか}憚らずして福音の奥義を示し」(エペソ人への書 第6章19節)

復活の主の力を受け、「十字架のあがない」と「みたまによる新生」を講筵なさいました。十字架の贖いで「我執の罪と死」から解き放たれて、「霊の貧しいすがた」とされた者(ゼロ(真空)を賜わった者)は、主キリストの御復活に与って新しい命(新生命)を頂くとともに、同時に、復活のキリストの生命の満ち満ちた聖霊が内住してくださいます。こうして「新生命を賜わった者」には、常に主様からの御護りと御導きが伴い、平安を賜わります。

みたま様との会話・みたま様の内住がある霊止^{ひと}は、躓いて転んでも常に復活し前進できます。感謝



(聖書の御言葉に熱中)

2019年11月24日

奥田先生は、集会の冒頭、

「聖書の御言葉に熱中して欲しい。切れば、血(キリスト)が飛び出る程に。今年度の集会のテーマである『聖書を生きる。キリストを生きる』為には、根底に主の十字架がなければ砂上の楼閣になってしまう。本当に主の十字架を受け取っていますか?」

と語られた。キリストは、

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(ルカ9・23)

と言われ、パウロは、

「わたしは、キリストと共に十字架につけられている。わたしは、もはや生きていない。キリストがわたしの内に生きてくださっているのだ。」(ガラテヤ2・19〜20)

と告白している。キリストの厳しい言葉に、生まれながらの人間的な思いで従おうとしても、自ずと限界がある。何故なら、生まれながらの人は、存在そのものが神の御心に従う事が出来ない(神の御心の前に己を立ててしまう)罪なる存在だから。神の御心に従えないということは、霊的生命の法則から外れ、光のない罪と死の法則に取り込まれるということ。生まれながらの人が人間的な思いで慈善活動をして、仮に能力的・道徳的に立派でも、自分の心に平安や天的な喜びが永続しないなら、やはり、罪なる我が思いに囚われているのだ。この罪と死の法則から解放されたいと悔い改めて、

「主が十字架によって、自分の受けるべき裁きを代わりに受けてくださった」ということを、感謝して受け取るかどうか。主の十字架を感謝して受け取ることで、心底悔い改めて主に降参することで、聖書の扉は開かれ、霊眼が開かれる。そうして、キリストと個人的な繋がりが出来れば、幹につながれた枝のように、キリストの聖霊の愛と力が流れ込んで来る。そうなれば、主の愛の働きが他へと流れざるを得ない。

奥田先生は、聖書の複数の箇所を自由自在に引用しながら、上記のような事を伝えようとされたかと思う。



（祈りの集会）

2019年12月1日

先生は、最初に、

「この集会は、祈りの集会です。聖霊に導かれた深い祈りの集会になるためには、各人がおかれた場所で一週間祈りを持って生活し、そこでの体験を携えて集会に出席することです。特別な用意をする必要はありません。毎日の生活において積み重ねられた祈りをもって集うと、自ずと霊に満ちた祈りの集会になります。主様とともにある毎日であるならば、必ず祈りの課題が与えられます。」

と話されました。このお話から、ルカ伝21章36節の、

「人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

コロサイ書4章2節の、

「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。」

エペソ書6章18節の、

「どのような時にも、霊に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。」

などの聖句が思い浮かんできました。

私たちの日常の生活は、決して平坦なものではありません。様々な苦難・艱難が待ち受け、周りには厚い雲が取り巻いています。だからこそ、霊の目を覚まして絶えず祈ること、神様と絶えず対話していることが大事なのです。祈りは、自分の要求をかなえてくださいというお願いではありません。主様に全托して主様を受け入れること、主様の御心が自分になりますようにと祈り願うことです。

そのような祈りが積み重なると、神様が、キリストによって大きな道を開いてくださったこと、自分は十字架によって贖われていること、常にキリストの守りの中にあることが実感でき、周りを囲んでいた密雲は十字架で吹き飛ばされて天上から光が差し込み、平安と生命とに溢れる世界へと導かれます。そして、

「私は、あなたを密雲から解放して自由にしたので大丈夫だ、大空を自由に羽ばたき、私の与える困難な使命を喜んで果たすように」

と励まされます。このような主様が呼びかけられる勝利宣言をしつかりと受け取り、どのようなマイナスもプラスとして、艱難を乗り越えて主様のために働きたいと願っています。

引用聖書（イザヤ書30章、35章、ヤコブ書4章、マタイ伝8章、ヨハネ伝8章、12章、13章、14章、詩篇119篇130節、箴言3章、コロサイ書3章、詩篇103篇、コリント後書3章16節以下）



（家庭集会在祈りの拠点）

2019年12月15日

奥田先生は、御自宅の2階で始められた小さな家庭集会在祈りの拠点となり、雨の日も風の日も聖日集会在護られ、その後、現在の集会场に移って今日まで、実に47年間続いていることに触れ、しみじみ、「その事だけでも奇蹟と思う」と話された。そして、集会を支えるのは「皆さん」であり、祈りの火が燃えていることが大事で、その基盤は十字架のあがないであると言われた。集会和学問との両立、聖日集会和この講筵準備など、大変なご苦勞があつたはず。そのお話しをきっかけとして、先生は次のような御言葉に注目して話された。

1 「忍耐」（ヤコブ書1・2〜4、ロマ書5・1〜11）

試練と忍耐、いずれも重い課題だが、試練にあうことによつて、その人の「信」がためされる。キリストの生命^{いのち}を頂いた者は、上からの力を受けて、御言葉が生活の中に活き活きと実践されていなければ意味がない。この「信」を頂いて、艱難、忍耐、練達そして希望へと進み、キリストを歡ぶ者とされたい。聖書は人生の応援歌であり、いのちを与える書である。

2 「我キリストとともに十字架につけられたり」（ガラテヤ書2・20、21、ロマ書8・26〜39、コリント前書1・18〜25）

ガラテヤ書2章20節以下を、いつも生活の根底にすること、この御言葉を心に響かせていること。讚美歌121番「馬槽^{まがね}のなかに」を深く歌うこと。ロマ書8章後半にある

「私たちがキリストの愛から離れさせるものは何もない。」

とのパウロの叫びをしつかり受け取りたい。

3 「人、新たに生れずば」（ヨハネ伝1・12、13、同3・1〜21、31〜36、同13・34、35）

キリストにより新生を頂いた私たちは神の言を語る天国人である。肉の願いによらず、人の願いによらず、ただ神によりて生れし者である。そのような私たちにキリストは、

「生ける望みを懷^{いだ}かせ、朽ちず汚れず萎^{しほ}まざる嗣業^{しぎょう}」

を継がせてくださる（ペテロ前書1・3〜4）。霊と心を一つにして聖霊の賜う一致^{あかし}を証していききたい。

4 「今年の標語と課題を振り返つて」

「聖書を生きる、キリストを生きる」、「一年に一人を（キリストに導く）、一年に一人に（キリストを伝える）」を、今後も各自の立場で実践していただきたい。

講演の要旨と聖書箇所

ヨハネ伝3章の「イエスとニコデモとの対話」において示されているように、生まれな



がらのままの人間(「肉」なる存在)は、新しく「天の次元(「霊」の生命^{いのち})」を頂かないと、肉体の生命の終りである「死」でもつて終つてしまう。

天界(神の实在界)より降臨したイエスは、「死」をもって終らない「霊的生命」(永遠の生命)を与えようとして不思議な業(奇跡)と権威ある言葉(霊言)をもって「神の愛」を示し、「神の国」(永遠界・实在界)を体現した。しかし、当時の宗教的敵対者の陰謀と、それに扇動された民衆によって、十字架刑という残酷極まりない刑を受け、命を奪われた。

祈ればまばゆい姿に変貌し、直ちに天界に入るにふさわしいイエスが、その十字架の死において「人々(我々人間)の罪」(神に対する反逆・自己中心なる罪)を背負ったのであった。贖罪の大業を果たしたイエスは、まばゆい栄光の姿で顕現した。イエスは、ユダヤ民族のみならず、全人類の過去および現在並びに将来の全人類の罪過を一身に背負って「贖罪の大業」を果たしたのであった。これを受け入れるか、拒むかは、人それぞれの自由に委ねられている。ヨハネ伝3章16節〜21節は、そのことを宣言している。

更に付言するならば、天界に在り給う「霊なるイエス(みたまのキリスト)」は、今もなお、「御名を呼び求める者」の傍近く臨在してくださり、慰め、励まし、力づけ、導いてくださる「救い主・助け主・導きの主」である。

イエスの言・行から

1 癒し

百人隊長の僕を癒す(マタイ伝8章5〜13節、ルカ伝7章1〜10節)

やもめの息子を生き返らせる(ルカ伝7章11〜17節)

ラザロを生き返らせる(ヨハネ伝11章1〜44節)

ヤイロの娘を生き返らせる(マルコ伝5章21〜43節、ルカ伝8章40〜56節)

2 慰め

「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す」(マタイ伝9章9〜13節、マルコ伝2章13〜17節、ルカ伝5章27〜32節)

「凡て労する者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません」(マタイ伝11章25〜30節、ルカ伝10章21〜24節)

3 復活して顕現したイエス、「マリヤよ」「ラボニ」(ヨハネ伝20章16節)

エマオへの途上における旅人の姿のイエス(ルカ伝24章13節以下)

